

第3回 安心・つながりプロジェクトチーム 会議 議事録

(開催要領)

1. 開催日時: 令和7年3月24日(月)10:30~11:45
2. 場 所: 中央合同庁舎8号館5階共用D会議室
3. 出席者(構成員):
 - 石田 光規 早稲田大学文学学術院文化構想学部教授
 - 大西 連 内閣府孤独・孤立対策推進参与
(特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやい理事長)
 - 勝部 麗子 社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会 事務局長

(議事次第)

1. 開会
 - ・友納内閣府大臣政務官挨拶
2. 議事
 - ・有識者ヒアリング
3. 閉会

(配布資料)

- 資料1 認定NPO法人全国こども食堂支援センターむすびえ提出資料
- 資料2 社会福祉法人三股町社会福祉協議会提出資料
- 資料3 NPO法人ソシリッサ提出資料

○大西構成員 定刻になりましたので、ただいまから「安心・つながりプロジェクトチーム 会合」の第3回の会合を開催いたします。

初めに、孤独・孤立対策担当の友納内閣府大臣政務官から御挨拶をお願いいたします。

○友納政務官 皆さん、こんにちは。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

今回は、国立社会保障・人口問題研究所の藤井先生から、現状のデータなどを用いながら、単身世帯の状況ですとか、同居世帯が単身世帯になっていく過程とかそのようなお話と、厚労省から現状の政策や取組の説明をいただきました。

今回は、NPOの皆様、民間の皆さんが実際どういう取組をしてくださっているかというお話をお聞きます。現場でまさに取り組まれている方々のお話を聞いて、政策につなげていくことができればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○大西構成員 ありがとうございます。

それでは、配付資料の確認と構成員の出欠状況について、事務局より説明をお願いいたします。

○堀江企画官 事務局でございます。本日もよろしくお願いいたします。

配付資料は、資料1から資料3まで、それから最後に1枚紙で第1回のときに出させていた論点の紙を配付させていただいております。不足はございませんでしょうか。

次に、構成員の出欠状況でございますけれども、本日は大西構成員、石田構成員、勝部構成員の全員に御出席をいただいております。なお、勝部構成員はオンラインで御参加をいただいております。ありがとうございます。

以上です。

○大西構成員 それでは、議事に入ります。

本日は、有識者ヒアリングとして、認定NPO法人全国こども食堂支援センターむすびえの湯浅さん、社会福祉法人三股町社会福祉協議会の松崎さん、NPO法人ソマリッサの萩原さんにお越しいただいております。

湯浅さんからは、居場所づくりの考え方、進め方等の総論的なお話の観点から、松崎さんからは、社会福祉協議会における地域住民と連携した居場所・つながりづくりの観点から、萩原さんからは、自治会と連携した居場所・つながりづくりの観点から、御説明をいただく予定でございます。

まず、全国こども食堂支援センターむすびえ、湯浅さんから御説明をお願いしたいと思います。

湯浅さん、お願いします。

○湯浅理事長 おはようございます。よろしくお願いします。

画面共有しながら話をしたいと思います。10分ということなので若干省略しながらの話になってしまうかと思えます。

「孤独孤立対策と居場所づくり」ということでレジュメを作りました。

孤独・孤立対策、個別事後対応的な個別支援、第1、第3分科会というものと、事前予防に当たる地域づくり的な取組、第2分科会的な取組があると思います。これを地域づくりと個別支援というふうにくくると、かなり広範な省庁、そして政策にまたがっていると思っていて、このあたりをまず共通して認識が持てるといいなと思っています。

居場所づくりに関しては、こども家庭庁のほうで居場所づくり指針をつくっていますけれども、そちらでは、地域づくり的なものは交流の居場所、ユニバーサル／ポピュレーションアプローチ、それから個別支援については支援の居場所、ターゲットアプローチと整理しておりますし、最近だと内閣府（共生・共助）のほうでも、多世代交流のプラットフォーム構築のモデル事業などが始まっております。

また、地域づくりについて言うと、総務省の地域おこし協力隊とか、国交省の小さな拠点、環境省の地域循環共生圏、こういうところも視野に入ってくるということになるかと思うのですけれども、社会的な位置づけとしては、地域づくりが主に共助的な取組、そして個別支援が公助、主な担い手としては、地域づくりが住民さんたち、そして個別支援が行政になるかなと思っています。

どうしてそういうふうになってきたかという背景ですけれども、細かいところは時間の関係で省略しますが、現在ということで一番右側のところ、「行政の肥大化が民間の助け合いを阻害している」、あるいは「いや、行政がやるべきことを民間に押し付けている」みたいな、やや二項対立的な議論があり得ますけれども、そういうことを超えて、公助・共助双方の強化・連携、そのための官民・民民連携の促進というのが今の課題になっていると認識しています。

地域においては、まずは地縁団体の強化・拡充、これは総務省を中心に取り組まれています。2点目に地縁団体とNPO等の協働。昨年、地方自治法が改正されました。3点目、地域づくりと個別支援の有機的連携、これは重層とかでは学び合いなどと言われています。4点目に多様な居場所による多様なつながりづくり、支援・交流の居場所の双方の連携。それから5番目の行政の適切な関与、交流の場所に対する後押しなどです。こうしたことが課題だろうと考えています。

これを山登り的に見ると、いろいろなところがいろいろな取組を今行っているのですけれども、今はこの辺りかなという辺りに線を引いておきました。現状、各所、目指している方向は大分共通しているのではないかなと思っています。先駆的な自治体もとても素晴らしい活動をやっておられる。ただ、全体として共有されているかという点、まだそこはこれからなのではないかなと思うところがありまして、必要なこととして、山頂の景色を共有しながら基本的な考え方を共有し、個々の取組を地道に積み重ねながら、しかし、タコつぼ化せずにお互い参照し合って、今後のより有機的な連携の余地を探り続ける、こういうことが今の課題と思っています。

2点目の基本的な考え方ということですので、3つほどを提示します。

1つ目はまず、人口減少局面においては、人数の減少数以上につながりの絶対数が減っていく。これは、人が減っていくと、全ての人が全ての人とつながるという理想的な状態を考えても、人数の減少分以上につながりが減っていきますから、健康状態がよく、所得が高い人でも、孤立リスクは全般的に高まっていきます。人口減少局面というのはそういう社会なのだとということです。

そして、それによって乗り越える方法というのは、1つ目に属性を超える、2つ目に分野を超える、3つ目に領域を超えるということで、孤独・孤立対策の文脈では、福祉を越えるみたいな話も出ていますけれども、そういうふうにして分野、属性を超えていくということが、現在の社会状況の中では求められるのだろうということです。

基本的な考え方の2点目として、人々が求めているものですが、つながりを求めているけれども、しがらみに対する忌避感は依然として非常に強いとも感じています。ですので、言ってみれば、SNS以上だけれども、しがらみ未満のつながり、こういうものはどうやってつくれるのだろうというような辺りが一つ考えるポイントになっているのではないかと思います。

3つ目ですけれども、目指すべきは〈どこも〉と〈どこか〉という2つの両立だと言っています。1つ目が、より多くの子や人によりたくさんの居場所をとということで、これはこども家庭庁のこども居場所づくり指針で言うと、学校も家庭もどこもかしこもということになります。他方、そういう場所がうまく合わないという人がいますので、そういう場合はどんな子・人にも少なくとも一つの居場所をとということで、これが支援的な居場所ということになるかと思っています。

この3つの考え方を持ちながら、それを共有しながら進めていくのが望ましいのではないかと考えています。

一事例としてこども食堂を挙げておきました。こども食堂は、昨年時点で中学校の数を超える1万867か所まで増えました。大都市圏というよりは、地方でより普及している取組です。大体小学校が3つあると1つには今、こども食堂があるという状態になりました。

8割は交流がベースの取組で、2割程度が支援をベースにしているわけですが、それぞれに強みと弱みがあります。オープン型のところは、より広い参加を促せるという強みがある一方で、匿名性がありますので、個別支援につながりにくいという弱みもある。他方、支援型の居場所は、とてもコアな丁寧なサポートができるという強みの反面、ラベリングされる、またはスティグマがつくということで、人が集まりにくくなるというような弱みもある。これはどちらが優れているかというよりも、両方が必要なのだという解に導いていきたいところですが、居場所のタイプによる違いというのは認識しておく必要があると思っています。

そうしたことについての行政の課題ですが、共助的な交流機能と公助的な支援機能に対しては、行政のアプローチも変わってくる、関わり方も変わってくるということで、

町内会と対比してパラレルに考えると分かりやすいのではないかと考えています。共助の取組に対しては、民間の交流を促進するような後方支援が行政には求められます。公助の一翼を担うような支援的な取組に対しては、もちろん公金の投入が必要になるということで、こうしたことで行政の関わり方も変わってくるかなと思っています。

以下3ページは参考資料なので御覧いただければありがたいのですけれども、最後、まとめとして言いたいと思います。

まず1点目は理解するということで、孤独・孤立対策には、既に孤独・孤立に陥っている人たちに対する個別支援と、孤独孤立に陥らない地域づくりの二側面があって、いずれの側面も他省庁の様々な施策と関連しています。

居場所づくりにも、同様に、居場所のない人たちを対象にした支援の居場所と、居場所のある人たちも含めた地域づくりとしての交流の居場所があって、両者の関係は、孤独・孤立対策の二側面と対応しています。

その上で、伝えるということなのですから、両者は車の両輪として地域への十全な実装を目指されるべきであって、そのためには、内閣府（共生・共助）、こども家庭庁、厚労省、地方創生が基本的な考え方を共有して、かつ、自治体の皆さんに対して統一感あるメッセージとして伝えていく必要があるのではないかなと感じています。

孤独・孤立対策、居場所づくりのいずれも、新しくかつ横断的な政策テーマでありますから、少なからぬ自治体が既存施策のデマケに苦慮されております。機械的なデマケは逆に重複感を高めます。あっちにもこっちにも協議会、あっちにもこっちにもコーディネーターみたいな感じで、逆に重複感を高めてしまうのですが、かといって福祉プラスアルファぐらいという認識だと、今度は逆に総合計画マターにはならない。自治体が横断的な課題としてしっかり据えるというところまで行かないということで、現状にはやや中途半端感があるかなと感じていますので、国にはそれを打開するリーダーシップを期待したいと思っています。

3として、その上で実装するということなのですが、個別支援には深い行政関与が求められる一方、地域づくりに関しては行政には後方支援による民間の共助促進・支え合い促進が求められています。

モデル事業を実施して、好事例を集め、横展開するという、一般的なサイクルを回されているわけですが、その際に、事業の性質と行政関与の仕方をよりクリアに明示して、個別支援、地域づくり活動それぞれの充実を図って、同時並行で両者の連携を促していく。そういうことが今の時代に求められているのかなと思いますので、孤独・孤立対策におかれては、その点に関するリーダーシップをぜひとも執っていただけたらうれしいなということをお願いして、私からの発表を終わります。

ありがとうございました。

○大西構成員 湯浅さん、ありがとうございました。

本プロジェクトでは3つ論点を掲げておりまして、多世代交流の視点も含めた多様な居場所づくりの促進・担い手の確保、それから受援力を高めるための個々人の意識醸成、3点目は支援につなげるのが難しい方に支援を届けるための取組ということを挙げているのですけれども、もし今の3点についても追加でこうしたらいいのではないかとか御意見があったら伺えたらなと思いますが、いかがでしょうか。

○湯浅理事長 それぞれに取り組んでいただいていることだと思うので、特にそれについてはありませんけれども、今言った3つも、先ほどの個別支援と地域づくりみたいなところに、それぞれ主にどっちに重点を置いているかと割り振れる取組だと思うので、そうしたことなかが十分に全体の認識として共有されていくことが大事ななと感じているということでした。

○大西構成員 ありがとうございます。

本日、湯浅さんは用務があるので、まずは湯浅さんに対して構成員の皆様から御質問等あれば、ここで伺っていただけらなと思います。ぜひ御質問のある方は挙手をお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

勝部さん、お願いします。

○勝部構成員 2つほどです。

地域づくりと個別支援のところを整理していただいて、居場所とつながりと言うと、多世代がみんな一緒にいることがつながりという理解の人と、個人のいろいろ課題を抱えている人たちをちゃんとサポートしていくための居場所というのと、混在して結構議論されることがあって、皆さんごちゃごちゃになって、同じ居場所と言っているけど違うステージでしゃべっているということがよくあるので、今お話をさせていただいた形で、オープン型のものであったり、クローズ型のものであったりということを整理しながら議論していくのはとても大事だということをお話しいただいて、よく分かったなと思います。

多世代交流ということで、みんなが仲よく、出会える場所、誰でも来ていいよと言っても、行けない人はどうするのとか、行かないという人への受援力はどうするのというところが今のお話で大変整理できたなと思いました。ありがとうございます。

○湯浅理事長 ありがとうございます。

居場所づくりも、孤独・孤立対策も、とにかく概念として新しいので、それぞれが自分の持っているイメージで話すというところがあって、そこを整理しながら進めていくというのは大事ななと。もちろん現実には両方の側面、両方の機能を持った取組がたくさんあるし、それはもうあっていいのですけれども、一回分けながら話すというのは御議論を進めていく上で大事な土俵設定かなと感じています。

○勝部構成員 ありがとうございます。

○大西構成員 石田さん、お願いします。

○石田構成員 湯浅さん、どうもありがとうございました。

御報告を伺っていて印象に残った言葉が、SNS以上、しがらみ未満のつながりが大事というところがすごく私も印象に残っておりまして、こういったつながりが本当に今、求められているのだと思う一方、こういったことはいわゆる強制力による部分をどこまで入れるのか。強制的と言うとちょっと言い方は悪いのですけれども、とにかく強制というのを嫌うという風潮がすごくあって、強制的に頼らず施設に来てもらう仕組みに恐らく頭を悩ませている人はすごくいるのではないのかなという気がするので、その辺りのお考えを聞かせていただきたい。

もう一点、湯浅さんはこども食堂をたくさんやっていらっしゃると思います。こども食堂は実際飲食店を経営している人とどう最終的にすみ分けていくのかなというのが結構興味がありまして、結局のところ、交流をベースとして食堂をやっているから補助がある。でも、飲食店でも交流はやっているのだけれども、飲食店は飲食店だから自分でやっているとかという、その辺りはなかなか兼ね合いが難しくなってくるのかなという気がしまして、その辺りのすみ分けというか違い、すみ分けていないのかもしれないですし、お考えをお聞かせいただければと思います。

○湯浅理事長 ありがとうございます。

まず2点目からお答えすると、小売、一般飲食店の脅威になるほどの広がりというのは、少なくとも今の今はないというのと、一般飲食店の方はこども食堂をやられていることを推奨しています。それは言うてみれば、飲食店は毎日やっているわけですが、こども食堂は月1回とか、週1回とか、そういう非常に限られた時期だということと、こういうことをやってくれないかといういろいろな飲食店に頼んでいるのは、例えば飲み物なんかは午後5時～7時は安くなるハッピーアワーみたいことをやっている、ハイボール100円ですみたいなお店がありますけれども、午後2時～5時の間は子供ランチが50円ですみたいな感じで、時間とかを区切ってこども食堂的なことをやってくれる。実際こども食堂をやっている飲食店さんは、そういうふうな感じで、月1回の定休日を利用して、月1回その日をこども食堂にするとか、そんなふうにやっていらっしゃるの、むしろ一般飲食店との共存とか、そこに機能をオンしていく、それがまたそのお店の評価を高めてお客さんが逆に増えるみたいなことが起こっていくといいのではないかなと思っています。それが2点目の御質問です。

1点目については、まさに居場所は、こどもの居場所づくり指針のほうでは「居たい」「行きたい」「やってみたい」場所だというふうに整理しましたがけれども、強制して来いと言って来てもらう場所ではない。逆にそれでは居場所にはならないと思っています。なので、本当に行きたくなるような場所が増えていくことが大事ではあるのですけれども、ノータッチでいいかという、話の持っていく方みたいなものがやはりあるかと思います。特にこれは子供というよりは中高年男性なんかでしばしば言われる、まさに勝部さんが得意な世界ですけれども、「あなたたち寂しそうだからいらっしゃい」といったような呼び

かけでは来てくれないので、「あなたの力が必要だ。あなたにやってもらいたいことがある。」と。それは駐車場の整理だったり、車の送迎だったり何でもいいのですけれども、「あなたの力が必要だ」とお願いすると、しょうがないみたいな感じで来てくれる。なので、助けてあげましょうという支援ではなくて、助けてくださいと言ってやる支援みたいなことがあると、強制ではないのだけれども、本人がそこに意義と役割と出番を感じて、意義に感じてくれて来てくれるみたいなことが起こりますので、そこら辺の支える側の工夫といいますか、強制にはならないけれども参加したくなる、参加しようかなという気になってもらうという促し方というのはとてもとても大事なかなと思います。

○石田構成員 ありがとうございました。

○大西構成員 私からも1点質問させていただければと思います。

先ほどの3点のところは、いろいろな既存の取組がある中で、同じ用語で違う景色を見ないで、同じ山を共有の言語を持って取り組んでいくということなのだろうと思っています。

1点だけ御質問があって、行政との関与の仕方のところで、むすびえさんも中間支援組織として全国のこども食堂を支援されていると思うのですけれども、そういった中間支援組織が今後どういうふうに関与の活動をより支援していくということがありますかということと、例えば行政が直接、個々の活動、その地域の活動を支援するとしたらどういう形があり得るのか。それから、中間支援組織を行政が支援するとしたらどういう形があり得るのか。ごめんなさい、抽象的なでかい質問ではあるのですけれども、御意見を伺えたらと思います。

○湯浅理事長 中間支援組織に対するサポートが割と有効なのではないかというのは、今日の資料に参考としてつけた中核市アンケートからも見えてきています。基本的には民間団体に委託、社協さんに委託したり、NPOに委託したりということが多いかと思うので、そこは行政が一般予算を計上してやる必要があると思うのですけれども、その中間支援団体は何をやってもらうかということになると、今日の資料には載せませんでした、我々として整理していることがあります。

その上で大事なものは、中間支援団体が地域をどういうふうにしていくことが望ましいのか、地域をどういうふうにしていくビジョンと、それから、それにひもづく指標、そういうものを開発していくことだと思っています。

これはこども家庭庁のほうで、今年の調査・研究事業でその取組をして、もうすぐ年度末ですから発表にも至ると思いますが、そういうものも一つの素材にしながら、地域をどういうふうにしていくことが望ましいビジョンなのか、それについての細目、そしてそれをどう評価するのかの指標開発、こうしたことが進んでいくことが望ましいだろうと思っています。

もちろんこども家庭庁が今やっていることだけではなくて、各省庁で割と類似したこと

をやっているのだと思っているのです。そのすり合わせと重ね合わせがこれからの課題なのだろうと感じているということです。

○大西構成員 ありがとうございます。

時間いっぱい質問をしてしまいましたが、お時間の関係がありますので、ここで湯浅さんは御退室をされます。お忙しいところありがとうございました。

○湯浅理事長 皆さんの御発表を聞けなくて申し訳ないです。退室させていただきます。ありがとうございました。

○大西構成員 ありがとうございました。引き続きよろしくお願いいたします。

(湯浅理事長退室)

○大西構成員 では、次に進めてまいりたいと思います。

2人目の御発表ですが、三股町社会福祉協議会の松崎さんから御説明をお願いしたいと思います。

○松崎氏 三股町社会福祉協議会の松崎と申します。よろしくお願いします。

今日は「COMMUNITY DESIGN LAB.」という、社会福祉協議会の中で新しいつながりをつくっていく、実践支援研究室と言っていますけれども、研究室をつくっているということと、僕らが考えているつながりの入り口、タグという考え方をしています。それを基に地域の実践事例をひもといていくという3つで御説明します。皆さんのお手元の資料がダイジェスト版で50ページぐらいなのですが、スライドが実は350ページになります。伝えやすさでスライドはぽんぽん飛ばしていくので、見ていただけるといいなと思います。

「COMMUNITY DESIGN LAB.」というのは、厚生労働省の重層的支援体制整備事業を活用し、地域共生社会を本気で目指すということで、実施している取組となります。

宮崎県の三股町というところで実践してまして、人口2万5000人ぐらいの町なので、皆さんの地域で言うと中学校区ぐらいのイメージで見ただけだと人口規模が分かりやすいのではないかなと思っています。

僕らがやっているのは、住民の人たちが自分たちの町を自分たちで楽しくしていけるようなことをコンセプトとして掲げています。本人の主体性が生まれるチャンスということなのですが、その方法として、地域の課題、いわゆる個別的な課題に即したアクション、活動とプレーヤーを生み出すことで、地域の困り事を解決していくという方法を取っています。それを漠然とやってしまうとふわっとしてしまうので、ミッションとして、今年までに200のプロジェクトとそれをやっている住民が2,025人という数値目標を出しています。2,025人というと、人口の10%になります。

どうやって増やすのかということなのですが、僕は社会福祉協議会の職員なのですが、これまでいわゆる住民さんの困り事みたいなものを丁寧に制度ひもづけの職員としていろいろ相談を受けるのですが、どうしても専門職で集まって、制度的なサービスが

ないときには、僕もやっていたのですけれども、ついついこちらで解決できませんみたいなことをやってしまって、結局自分でどうにかするみたいなことがずっと起きていたのですけれども、今、「COMMUNITY DESIGN LAB.」でやっているのは、住民さんの困り事を何も専門職の者だけにせずに、ちゃんと相談を受けて、それに対して集められる人を集めて、みんなでアイデアを出していくみたいなことをやっています。

大分抽象的なので具体的に話しますと、3つの場づくりを行っています。3つの場づくりというのは、考える場と、魅せる場と、出会う場です。これを地域にポイントでつくってあげれば、さっきのように課題をアクションにしていけると思っていて、例えば考える場所というのは、具体的な個別事例をケース検討のように話す場とか、社会問題井戸端会議といって、オープンで地域の人にテーマで集まってもらってみんなでアイデアを出し合うということをやっています。これは子供の不登校のことを話し合った時の内容なのですけれども、そのほかにも技能実習生のこと、コミュニティーを話し合うとか、こういうことを2〜3か月に1回やっています。

そうやって考えていくと結構いいアイデアが出て、実践となるのですけれども、ついつい僕ら福祉分野はそれを一部の人たちだけでやりがちになってしまうので、それを広く地域の人に知らせていく魅せる場をつくっています。これはデザイナーの人たちと全ての活動にロゴをつけたり、一つ一つのプロジェクトに背景を持たせていたり、行政の広報物を変えて新しい入り口をつくっていたり、そういうふうに見せていたりとか、あとは空間をつくっていくとか、プロダクトを地域の人たちとつくっていくみたいなことをやっています。

こういうふうに見せていくと面白い人たちがどんどん出てきて、これはお医者さんの地域とつながりたいんだという相談を僕が担ったので、僕らは「ドクターヤオヤ」という、医療ではなくて先に野菜で有名になりましょうということをやって、今すごく地域で集まりの場になっている。それに気をよくして、次は「ドクターサカバ」という歯医者さんと居酒屋をやったりとか、このようにちょっと変換させたデザインをやったりとか、これはホームページのトップページなのですけれども、今日現在の地域活動とかアクションのプレイヤーの数みたいなものがホームページ上で分かるようになっていて、全ての活動の背景と、何でもこういうことをやっているんだみたいなことを知らせるようにしています。

そうやって見せていくと、興味のある人が増えたりとか、福祉分野外の人たちが興味を持ってくるので、そういう人たちが日常で出会う場所が必要になります。出会う場というのは、空間的に福祉相談窓口とかではなくて、日常の暮らしの動線上にあるものを地域の中にたくさんつくっています。これはカフェスタイルで運営している地域の場になります。毎日型でやっているのですけれども、スタッフは傾聴ボランティアで、67歳ぐらいが平均年齢なのですが、初めてカフェスタッフをやるというので、オーダーを住民さんに書いてもらうようにするとか、そういう配慮をしてくれて、本当に多様な場として広がっています。

あとは樺山購買部です。これは商店です。これもまた地域の団体と、いわゆるちょっと過疎的な地域に惣菜を買える場所等をつくったりとか、スタッフにおみくじをやってもらって新しい動線をつくったりとか、あとは「WAJIMA」という宿泊施設兼コミュニティスペースみたいなもの、これは技能実習生のコミュニティで、日本語を教える場が欲しいというので、空き家を改修して地域の人たちでつくった。あとは最近、若者の行く場所が全然ないというのがアンケートでもあって、「NAZO」という地域の若者と回収した古着を販売していくという古着屋をやって、新しいつながりをつくっていくとか、こういうふうに3つの場、考える場と、魅せる場と、出会う場をつくることで、具体的にプロジェクトが増えていくというのが「COMMUNITY DESIGN LAB.」です。

次に、つながりの入り口でタグと書いているのですが、それでも、「COMMUNITY DESIGN LAB.」を実践する中で、地域の人とやっていて気づいたことがありました。それは人を多面的に見るといことです。どういうことかということ、小学生A君による具体的事例を出すのですが、A君は社会福祉協議会に相談があったときにこういうタグだったのです。「#学校に行けていない」、「#友達がいない」、「#マイクラフトがすごく好き」、「#体を動かしたそうである」。通常僕らは福祉分野だと、「#学校に行けていない」という課題を抽出して、それを何とかしようとするのですが、タグが実はつながりにすごく大事だということに気づいて、A君の場合は、「#体を動かして遊びたい」というタグで何かできないかと思ったのです。

これはいろいろな人が分かりやすいというか、つきやすいタグだということで、小学生A君の体を動かして遊びたいタグで、「ゆるスポーツ」という、スポーツを緩くやる人だったら誰もが来ていい場をつくったのです。体を動かして遊びたいだけが入口なので、結果的にいろいろな人が来れる場になりました。そんなときにA君が、僕に対して、ブレイクダンスをするから見てくれと言ったので見に行ったら、くるくるした床が滑りやすいところでくるくる回っていたのですが、A君はそんなタイプではなかったので、僕も一人で抱え切れなくて、皆を呼んだら、A君に思い思いの返しをします。「先行っているな」とか。そうするとA君が家に帰ったときに、自分で実は面白いんだ、自分は結構面白い存在なんだみたいなことをお母さんに言っていたらしくて、もともとはこういうタグだったのですが、でも、「#体を動かして遊びたい」という極めて誰でもつきやすいタグで出会った場では、こういうことが生まれていった。

これをもう少し俯瞰的に見てみると、例えば学校という場がもしかしたら自分の持っているタグで合わなかったときに、自分は駄目だみたいに思いがちなのですが、地域にこういった場がたくさんあれば、駄目な自分もいるし、面白い自分もいるし、多面的になっていくのではないかと。つまり、とにかく地域には多様な場が必要だということが分かったのです。

多様な場があることが大事だと分かって、地域での具体的実践事例をいくつか紹介す

ると、先ほど湯浅さんが言われていましたけれども、福祉はどうしてもどこかにつながるか、困っている人をどうにかするというのが一番に来てしまうのですけれども、何も支援を入り口としてではなくて、本人が気になるみたいなことを入口とした場づくりをしたら、結果的に支援になるのではないかみたいなことを感じるようになって、それを今、積極的に取り組んでいます。

ケース1、「よる学校」です。これは夜に開校するのですけれども、毎日開校しています。僕は昼は福祉専門職で、福祉専門職としか会わないのです。でも、夜は地域という枠組みだけで実はすごく出会えるのではないかとということで、実際に地域の保育所施設を夜の時間借りて、キャンパスのように見立ててやっています。地域のやりたいと地域の困ったを絶妙にチューニングしていく感じです。地域のやりたいみたいなものを全部教室化してって、誰かのタグにかかるといけないかということで取り組んでいます。

具体的には、面白そうなかくれんぼをしたいときに、「自衛隊を探せ！！」という、自衛隊員と本気のかくれんぼをしてみたりとか。僕らは、それまで、引き籠もっている家庭の子供に出会えなかったのです。相談をしたりとか、何かの場をセッティングしても来ない。しかし、ここには来ていたのです。これは2年前ぐらいの事例で、今ではその家庭とつながって、ちょっと発達に問題のあるお子さんだったので、いわゆる支援的なことができています。

それで気をよくして、自衛隊にかくれんぼを教えてもらおうみたいなことをやったら、全然人気なくて人は来なかったのですけれども、本当に自衛隊に興味がある人たちが来てしまっ、結果的に高齢者や、外人も来ました。最終的にこうやってかくれんぼの技術を学んだという感じなのです。

マージャンって何、これはマージャン教室なののですけれども、地域のマージャン好きのおじさんがやっていたのではないかと思われがちなののですけれども、これは逆で、地域の公共施設にいつもいる男の子がいて声をかけたら、引き籠もっているから、昼間いつも外に出される。けれども、行くところがないから公共施設に来ているのだということで、これもよる学校につながうと思ったのですけれども、興味のあるタグ、教室がなかったのです。でも、話を聞いているとマージャンは興味があると言っていたので、その子のためにマージャン教室をつくるために、地域のおじさんたちに声をかけたのです。逆に役割が増えて、今ではおじさんと、その男の子がマージャンがすごく上手になって、その教室を取り回しています。

これは何でもよくて、地域のやりたいを表現することで、いっぱいタグが出るのです。それによって、来る属性とか、高齢者とか、障害者とか、違いがあります。これはすごく社協らしいテーマで、ペタンクというのがあるのですけれども、ニュースポーツで高齢者クラブがすごく一生懸命やっているのだけれども、新しいメンバーが入らないという悩みを抱えていたので、よる学校の特別教室にしてやってみたらということでやってみると、地域の

若者たちがそこに来てくれて、結果的にペタンクのクラブに入ってくれるみたいなことが起きた。

あとは、そばとディスコを重ねようみたいなことで、地域のそばづくりがうまい老人クラブがあるのですけれども、そばづくりだけだと若者が来ないので、間にディスコみたいなものを絡めて、最後、そばを食べるみたいな。これは「自衛隊を探せ！！」から一生懸命来てくれるようになった外国の方なのですけれども、こんなふうに何でも地域のやりたいを広げていくとどんどん広がっていくのです。

多様な場ができて何が起きたのかというのも結構大事で、交流が生まれるだけで、誰かに支援として届くのか。ケース2、「ひる学校」というのがあるのですけれども、よる学校というのは誰もが来ていい場なので、月で言うとも500人ぐらいの人たちが来るような場になっているのです。500人の人たちがつながっていくと、結果的にひる学校というフリースクールができました。これは、よる学校で出会った地域の人たちが、不登校の子供たちに向けて説明会をやっているところです。

こういうふうに、ひる学校ができたのですけれども、これを構造で考えてみると、先ほどの湯浅さんの話と重なるのですが、多様なつながりを考える上で、実は地域に大きく関わっている2種類の間がある。交流目的の間と支援目的の間。交流目的の間というのは、誰もが来ていい間、僕らみたいな福祉専門職がやっているものは、例えば認知症のカフェとか、誰かを支えるという目的で間をつくるのですけれども、つい赤いところの2階をつくろうとすると、担い手がないとか、ニーズがないという話になるのですが、実はつながりをつくるだけでもすごく意味がある。

よる学校というのは500人ぐらい来ているので、いろいろなつづやきが聞かれるわけです。このつづやきをきれいに拾っていくと、例えば昼は学校に行っていない子たちがいっぱい来ていたとか、近くの児童館は使っていないよとか、何かしようよと言っている大人とかがいっぱいいる、学校の先生が来ているとか、これをうまく組み合わせたのが、ひる学校です。これは財源があって、制度的にやったというよりも、地域の人が出会って、形をつくって行って、結果としてこういう支援のものができた。そして2階建ては混ざり合うこともあるということで、丁寧にやっていくとこういうふうに混ざることもある。

ケース3が「ぴしゃトレ」で、「ぴしゃトレ」というのは僕らの地方の言葉でちゃんとという意味なのですけれども、それをやっているのです。何がすごいかというと、武道館を貸し切っているのですが、毎週木曜日にこれが行われるのですが、登録者が350人ぐらいいるのです。350人というと、三股町の高齢者人口の約5%なのです。約5%が毎週集まる。これは男性がすごく多いのです。そういうふうにもうタグを切り貼りすると、すごく短時間でフィットネス的に今の高齢者はやりたいのではないかと思います。これをひもづけてやると、結果的にそういうつながりを生む場になった。単純にフィットネスだけで終わらせずに、惣菜を持っていったりとか、いろいろなクロスを生んでいるような形になります。

最後になります。「どうぞ便」というのがあって、本当は独り親のお母さんとかに、子供たちにどうか支援を届けたいという内容だったのですけれども、フードバンク的にするよりも、地域の新鮮な食材をもらえると助かるみたいなタグに掛けていったほうが届けやすいのではないかとということで、地域の食材をどうぞということで、「どうぞ便」と名づけているのです。こういうふうにはフードロスの、育ち過ぎてしまった野菜とかを地域の人たちが届ける。こんな感じでもらってきた食材を地域の人が届けるということなのですから、届けるというところに実は結構高齢者の人とかもすごく共感してもらって、いろいろな人に役割ができていたりとか、こんな感じです。結果として今、100世帯、330人ぐらいにつながったといった事例です。

駆け足の説明でしたけれども以上です。

○大西構成員 松崎さん、ありがとうございました。

続きまして、NPO法人ソソリスの萩原さんから御説明をお願いしたいと思います。

○萩原代表理事 NPO法人ソソリスの萩原と申します。よろしくお願いいたします。

私たちは「ひとりで抱えずに、優しいつながりが、溢れる社会をつくる」というところをビジョンに掲げて、高齢者や若者と共に多世代が参加する地域社会をつくりたいという思いで活動しています。

今まで創業してから5,000名以上の高齢者の方と2,000名以上の若者が参加して、いろいろな取組を実施してきました。大まかに説明をすると、まごマネージャーという地域福祉とか地域づくりに興味関心のあるような若者だったりとか、何かもやもやしている若者たちと関わりながら、訪問だったりとか、サロンだったりとか、相談支援だったりとか、ほかにも様々な個人プロジェクトをいろいろな方々と協働して実施していく活動をしています。

関係機関としては、県の介護高齢課の方から事業の委託をいただいたりとか、ほかにも県内の大学とか高校とかいろいろなところと連携して、地域福祉とか地域づくりに興味のある若者だったりとか、違和感だったりとかももやもやを抱えている若者が集って、あとは市内の関係機関だったりとか、今は特に自治会と関係をつくりながら、自治会と一緒に協働していくようなプロジェクトを実施しています。

まごマネージャーが生まれた背景なのですから、地域福祉に貢献したい若者が結構集まってきたというのが最初の活動で、地域の課題とか現状に違和感を覚えていたりとか、地域活動とか多世代交流に関わりたいたとか、地域で何かを始めたいけれども具体的にどうすればいいかわからないという若者たちがいて、そういった若者はモチベーション、ポテンシャルもあるけれども、地域福祉の接点がなかなか持てていない。

一方で、なかなか話し相手がいなかったりとか、生きがいなかったりとか、人に頼れず一人で抱えてしまう高齢者の方にたくさん僕も出会っていた中で、そういった高齢者の方に、他者や地域から興味関心の目が向かずに孤独になってしまっている。では、こうい

う部分をうまくつなげられたらいいのではないかとというのが最初のきっかけになります。

地域に関わりたい若者は、高齢者の方と関わっていく中で、孫みたいな自然な日常の関わりを通して関わっています。そうすると受け止めてもらえ、そこから高齢者の方も若者との交流で笑顔になったりとか、おせっかいをかけたりとか、人生相談に乗ってもらったりしていくと、若者にとって居場所になっていって、高齢者の方にとって孫のような存在ができていく。それによって日常的に話し相手が増えて、笑顔が増えて、高齢者は若者に知見や学びを伝えていって、生きがいとか社会的役割に自然につながっていく。

若者は、自分の問題意識を話しながらも、高齢者や地域から愛情や文化などを受け取って、他者や地域への貢献心が自然に育っていく。高齢者や地域の実情を知って、貢献心を持って社会に出ていく糧となっていく。それによって、地域や他者に興味関心を持った若者が地域に入ると同時に、高齢者が生きがいや社会的役割を持って地域とつながるというところを実施していきたいと思っています。これを群馬県内で増やしていきたいということで取組を進めてきました。

事業内容としては、認定まごマネージャー育成プログラムという県の受託で実施させていただいているプログラムがありまして、これは地域福祉に貢献したいという思いを持っている若者たちが、半年だったりとか、今年度は10か月ぐらい学ぶようなプログラムで、リーダーシップを発揮したり、地域の関係者の方と関わりながら、自分の内面も深掘りながら、プロジェクトを起こしていくというような事業をやってきました。

ほかにも自治会の伴走支援というところで、自治会長さんや地域の方と一緒にしながら、若者やNPOが担い手として、一緒に同じ問いを共有して関わっていく中で、自分たちができることを一緒に取り組んでいます。

高齢者見守り・コーディネートサービスという訪問事業は、制度ではなかなか対応できないけれども、孤独な状態の人に対して定期的に訪問をして、個々人の思いや背景を酌み取りながら、興味関心とか、関わりながら社会とのつながりにつなげていくというような事業を実施しています。

高齢者向けのサロン事業というのは、社協さんとか、自治会とか、企業とか、いろいろなところと連携をしながら実施をしていて、年間、若者が400名ぐらい参加しているのですが、環境学習の高校生、地域福祉に関わりたい大学生や、社会人のボランティアの人が参加をしていて、自分の得意なプロジェクトで、例えばコーヒーの淹れ方が得意な子はドリップコーヒーの淹れ方講座をやったり、猫背改善の姿勢を良くするトレーニングをやったり、高校生とかはスマホの講座とかを一緒にやったりします。

僕たちがポイントにしているのは、本当に高校生などが参加したときに、自分がどう感じたか、どういうことを考えているか、どう思ったかという自分の動機や思いというのをすごく大切にされていて、振り返りや対話をとても大事にしています。

あとは居場所事業で、高齢化率の高い団地の真ん中に拠点を移して、そこへ定期的に

若者やボランティアの人が、いろいろな講座、自分たちがやりたい講座を地域でもヒアリングしながら、一緒に地域の人たちと、民生委員さんとかにも関わってもらってつくっている居場所も実施をしていきました。

まごマネージャー育成プログラムの中で、今年度実施した地域実践プログラムを御紹介させていただきます。

僕自身が、高齢者の孤立・孤独を地域の日常的なつながりをつくって解決していきたいと思ったときに、自治会長さんからいろいろな相談を受けていたときに、前橋市は自治会の加入率が90%弱ぐらいというかなり高いエリアなのですけれども、自治会構成員が高齢化をしていて、いろいろなサークルだったりとか老人会、婦人会とかも解散していったりとか、お祭りとかを実施するのも結構大変というところで、担い手が結構大変だよみたいな話をすごく聞いていた中で、より今のままで継続していったりとか、より今後、担い手の後期高齢率の増加だったりとか、いろいろなところも含めてより新しい在り方を考えながらプロジェクトができればいいのではないかなというのを思っていました。

そこで、2自治会と協力をして、若者たちと一緒に地域で新しい取組を、自分の思いも大切にしながら関わっていくようなプログラムをつくりたいというところで、地域とか自治会にとってよい変化を生む推進力になりたいというところでプロジェクトを立ち上げました。

イメージとしては、今の専門職の方だったりとか、地域の自治会長、民生委員さんがやっているような会議にプラス、若者たちが独自に関わったり、僕たちNPOのようなところが補助的に関わっていたりとか、本当に高齢者の孤独を笑顔にしたいとか、問いをみんなで共有していくというスタンスでフラットに関わっていく場をつくっていききたい。なので、縦型の関係性というよりは、本当に話を聞いてもらって、受け止めて、その思いを伝えるという対話を中心とした場を地域の人たちとみんなで作っていく。そうすると本当にいろいろな自主的な活動とかが活発になったりとか、自分たちのできる範囲で関わっていくという取組になるかなと思っています。

若者たちは、自分が理想とするありたい姿、つくりたい社会、地域福祉の取組の解像度を上げていきながら、自分がどう感じたかとか、自分のやりたいことはこういうことなんだよねという延長線上と、地域福祉・地域づくりをつなげるということを大切にしています。

そのために1年間を通して、キックオフのミーティングがあったり、中間発表、最終発表、実践期間があって地域に入っていく期間とか、自治会長さんに提案したり、コミュニティで学んだりということをやっています。ステップとしては、自分を知り、地域を知り、現場を知り、実践をしていくという4サイクルを回しています。

まずは自分を知るというところでは、自分についての理解というところで、自分がもやもやしていることとか、課題意識とか、自分が地域にどういうことをやっていきたいかと

いうことを棚卸ししたり、地域の自治会長さんや専門職の方も含めて対話をしていて、対話と講話をいろいろ用いていきます。

その中から、地域のいろいろな専門職の方から話を聞いたりヒアリングをして、地域はこういう形で動いているんだよという理解を深めていきます。そこから自治会長とか、生活支援コーディネーターさん、社協、包括の方とかからもいろいろな話を聞きながら、自分たちの思いも伝えていきます。

そこから実際にサロンの現場に入っていくたりとか、僕たちの現場で高齢者の方と関わったり、お祭りに参加してみたり、地域のカフェにヒアリングをしていくたりとかして、高齢者の方の気持ちだったりとか、背景だったりとか、いろいろな人たちがどんなことをやっているかというのを知っていきます。

そこから自分たちの特色とか強みを生かしながら、プロジェクトのミーティングをたくさんしたりとか、自治会長さんに提案のミーティングのお時間を作ってもらって、問いに対して対話をするというような場をつくっております。そこから中間発表で、いろいろな人たちにフィードバックいただきます。

一つのプロジェクトなのですけれども、これは新田地区というエリアの地区で、若い男の子がカフェで働いていて、コーヒーを淹れるのを自分で地域でやってみたいと。現場で話したら高齢者の人もやってほしいということでしたので、立ち上げようということで、企画をしてやっていったのですけれども、新田地区のいいところをみんなに書いてもらおうみたいなワークをやったりとか、質問カードを若者たちが作ってコミュニケーションを取ったりとか、そういったプロジェクトをやってきました。

こういったことを通して、普段来なかった高齢者の方や地域の人に参加して、初めてこの地域に住んでいてよかったとか、ほかにも地域側から、若者の話を聞いたので、若者と一緒にプロジェクトを起こすにはこういうことが大事なんだと気づいたとか、このプロジェクトは地域側で自分たちが持続できるよねと地域の人たちが言っているの、今、地域側でこのプロジェクトを継続的にやっていくというような関わりを担っています。

こういった最終発表会で、地域の人だったりとか、大学の先生だったり、いろいろな関係者の方も呼びながらプロジェクトを発表して、フィードバックをもらって、対話をしていく、そういった場を実践してきました。

僕たちは、このような担い手の人材育成と、自治会とか地域に関わっていきながら高齢者の方を対象としたサービスの展開をしてきたのですけれども、今後は、今まで僕たちのコミュニティに参加してくれていた、地域づくりとか地域にちょっと関わりたいのだけれどもやもやしている若者たちのコミュニティを問いとしてつくっていく、みんなが主体性を持って楽しく関わっていく、そんな場をつくっていきたいですし、自治会長さんや地域の人々もそういったところに入ってもらって、どうやったら本当の意味でフラットに協働できるかという問い掛けをしていくような形で事業を推進していくようにしていきたい

と思います。

御清聴ありがとうございました。

○大西構成員 ありがとうございます。

若干時間が押しておりますので、御質問と御意見とを併せて伺えるような進行をしたいなと思っておりますので、構成員の皆様から御質問と御意見をまとめて伺っていききたいなと思います。御発表の中で気になったところ、コメント、感想でもいいですし、長期的視野に立った孤独・孤立予防の観点からの居場所・つながりづくりとか受援力の向上といった観点からでも構いませんし、自由に御発言いただけたらなと思っております。皆さんいかがでしょうか。

○勝部構成員 ありがとうございます。

三股町の松崎さん、ますますパワーアップしていて面白かったです。ありがとうございます。

よる学校の話で、いろいろな施設とかが協力してくれて場所を提供してくださるということなのですけれども、一斉開校というのは、1時間目、2時間目と分けて開校しているのでしょうか。

○松崎氏 基本的に午後6時半～8時までのいわゆる小学生低学年でも来やすい塾の時間みたいな設定をしていて、毎日やっているのですけれども、できるだけ複数の教室が開かれるようにしています。というのは、自分の興味というのは最初はすごく小さいものなのですけれども、そこで出会ったおじさんがやっているのがマージャンだったりとか、そういうクロスしていくみたいなものを狙っているのです、できるだけ興味のなさそうなものとか、凸凹させるというか、そんな感じで一斉開校しています。

○勝部構成員 かなりパワーが要するというか、それぞれのところの内容をファシリテートする人たちがいないと、何となく集まっただけみたいなことになってしまいそうな気がするのです、そこをどんなふうに工夫されているのかなというのが1つです。

それから、まごマネージャーの件なのですけれども、すごく面白くて、若い人たちに関心を持ってもらって、町おこし、地域づくりをやっていくというのは民主主義の学校みたいなものなので、皆さんがこういうことに課題意識を持ってもらうというのをにつくられているというのは非常に感心したのですが、若い人たちは瞬発力もあるけれども継続性が難しかったりとか、それから、お金がつかないとずっとバイトを休んでやるというのも難しかったりするのではないかなと思うので、その辺の工夫がありましたら教えてください。

○松崎氏 よる学校は、勝部さんがおっしゃるとおりで、すごくコーディネートが大事なことです。そのコーディネートというのは、ただ社協職員を張りつけるということではなくて、持続性の観点からも、地域の人がコーディネーターになるというのを目指していて、よる学校コーディネーターという、いわゆる学校をコーディネートしていく人たちを一回募集したら15人ぐらい来たのですけれども、今、7人ぐらいが真剣にやっていて、まさにそうい

う人たちがやっているのです。財源的補填は今、休眠預金事業で取って、コーディネーターには有給としてやってもらっている感じです。

○勝部構成員 ありがとうございます。

では、ソンリッサさんお願いします。

○萩原代表理事 ありがとうございます。

若者たちも、高校の環境学習で入ってくる若者とかは単発とかが多いので、僕たちのつづいているサロンの場に参加してもらって関わるという単発が多いのですけれども、地域のプロジェクトに関わる若者は、もちろん長期で関わる若者もいるのですが、半年間とか、10か月とか、プロジェクトを決めて関わってもらう若者も多いです。

結構地域の中で継続性の課題だったりとか、責任があるのではないかみたいな話はすごく出るので、僕が本当に孤独・孤立だったりとか地域のつながりを日常的につくっていくとなったときに、地域側が若者たちが入ってくることによって得るものはすごく大きいなと思っていて、若者が話をしているのをまず地域の人に聞いてもらうのを大切にしていって、まず聞いてもらって、受け止めて、自分の気持ちを伝えるというのを大事にしていって、若者たちが入ってくると、地域の人たちに対して、自治会長とかにもびびってしまったりとか、ちょっと怖いなと思ってしまったりとか、あと専門職の方から責任があるんだと言われてしまうと、ちょっとしんどくなってしまう若者はすごく多い。

でも、若者たちが入ってきて、地域の人から話を聞いたりとかすると、自治会長もうれしくなってくれてすごく話したりとか、地域の人たちも、こんなに若者は興味を持ってくれているんだとなっていて、今後地域づくりをしていく上で、そういう土壌をいかにつくっていくかというか、そういうものが大人だったりとか地域側の責任としてあるのではないかなとか、そういう関係性をつくるようなきっかけをつくっていく。それに触発されて、地域の人たちが、自分たちでもできるのではないかと、若者たちにまた今後も来てよみたいな、そういう関係性を地域につくっていくって、そういうデザインを地域のいろいろな包括だったりとか、社協さんとか、そういった方と協働しながら、そこを仕組み化していくというか、ある意味本当に主体性を潰さずに、地域の人材として若者を育てていくということが今後の地域づくりに大事だなと思ったので、その意識も、地域の人たちのまずは話を聞いて、受け止めて、理解して、地域の人が伝えたことを若者たちも理解をして、じゃあどうやっていけばいいんだっけという問いを真ん中に置いた関係性をつくるのが地域にとって学びなのだと思います、ここをちゃんと伝えていけることが、今まで取り込んでいなかった若者たちの気持ちだったりとかを大切にしながら、地域に興味を持ったりとか、自主性が出てきてプロジェクトにつながるのではないかなと僕自身は思っていました。

○勝部構成員 お金は出していますか。

○萩原代表理事 お金は出していません。高校生とかは出してなかったりとか、ボランティアの登録で来ている若者たちは交通費が出ていたりとか、ほかのプロジェクトで講

師をやっている若者には講師料が出ていたりとかするような若者もいたりしますし、訪問とかはお金が出ています。物事の関係性によって変わっている感じです。

○勝部構成員 ありがとうございます。

○大西構成員 勝部さん、ありがとうございます。

石田さんからはいかがですか。

○石田構成員 お二人とも貴重なお話をありがとうございました。

湯浅さんの話も含めて、感想なのですけども思ったのは、私、強制についての兼ね合いの質問を先ほどしまして、そのときに湯浅さんは行きたくなる場を増やすということをおっしゃっていて、お二人とも奇しくもやりたいことを見つけて、そこから広げていくことだということをおっしゃっていたので、いかにその人たちその人たちが持っているやりたいことを発見して、そこからそれをどうつなげていくかということをしちんとしていくことが大事だなということを感じた次第です。

こちらは感想なので、これからが質問でして、まず松崎さん、単純にすごいプロジェクトだなと思いながら、どれぐらいの人数でやっているのかということをお聞かせいただければと思います。もう一つはお二人に対しての御質問で、好事例は素晴らしい事例であるゆえに、すばらし過ぎて、羨ましいけれどもうちには無理ですみたいな感じになってしまうことが結構あったりするのかなと思うのです。ですから、まずうちには無理ですみたいな感じにならないために、どういったところから取り組んでいけばいいのかとか、あるいはやっていくときにどんなところに気をつけていけばいいのかということをおアドバイスしていただけますでしょうか。

○松崎氏 まず、どれぐらいの人数でやっているかというのは、今、よる学校のコーディネーターは7人いて、その7人がいわゆるコーディネートをしているのですけれども、コーディネーターは教室を主催する人間ではなくて、いわゆる教室が生まれるコーディネートをする人、例えばまんじゅうを作るおばちゃんがいたら、おばちゃんのまんじゅう教室とか、その人のやりたいをタグにして、いろいろな人がつながる、いわゆる主体性を育むコーディネートなののですけれども、それが7人で、実際参加している人は、参加者とかやる人とかがすごく入り交じっているのですけれども、月で多いときで延べ500人ぐらい来るような活動になっています。

二つ目の質問について、好事例と言うとすごくあれになってしまうのですけれども、取りあえず僕らが少なくともちゃんと行きたいなと思える場所を地域の人たちと表現していく。その結果としていろいろ出てくるではないですか。それをできるだけ一般化するようにして、例えばよる学校で言うところすごくタグが大事だとか、2層性になっているから結果的に支援になるとか、よる学校というままで横展開はできなくても、一般化したものであったら持てることができるのではないかと、僕らは社協なので、ほかの社協でも取り組めるようなことを意識しながらやっています。

○萩原代表理事 ありがとうございます。

今、本当にその部分が自分たちの中で課題というか、事業をやっていながら振り返りをして、よりどういうふうにしたら広がっていくのかというところを考えながらやっているのですけれども、そこを考えたときに、自治会とか地域機能の基にある組織、地域組織の方と一緒にやっていくというところが大事なかなと思っていて、かつ、地域福祉とか地域づくりをやりたいけれども、もやもやしている若者たちの問いをちゃんと共有したりとか、もやもやをつくっていく場をつくっていったら、そこから主体性を持って地域に入っていくところのつなぎをある程度ちゃんとやりたいなというところ。

あと、地域側に入っていくときの土壌をいかにつくるかというところが大事なので、例えば話を聞いて、受け止めて、伝えるスキルのところをやっていったりとか、大体その地域の自治会とか、プロジェクトを進める上で課題になっていくところがあるので、ある程度そこは押さえながら、ここのポイントのときはこういう解決策だったりとか、こういうやり方が大事ですというところはある程度まとめて、そこは自治のコミュニティーをつくっていくようなコーディネーションのノウハウだったりとかポイントをまとめながら、本当に地域の人と一緒にじっくり関わっていく。

ものすごい武器とかはないので、本当に確実な対話とか、話を聞いて伝えるとか、あと地域のこういうフェーズではこういう課題が多くあるから、そこに対してこういう打ち手があるとか、こういう事例があるというのを丁寧にまとめて、若者だったりとか地域の人たちが関われるようなコーディネーターというか、本当に自治のコミュニティーに特化したものが問いの中から生まれてくるといいのかなというのは思っています。こうやると成功しますではなくて、問いを起点にどうしていくかというのを、その場その場で問いをつくれるようなコミュニケーションができるようなところを興味のある人たちで考えていったら、それをうまく実装していけたらいいのではないかなというのは、僕ももやもやしながらやっている感じです。

○石田構成員 もともとは自治会からこういうふうにしてくれませんかというお話が来たのでしょうか。それとも、出向いていったら、こういうことをやりませんかという感じだったのでしょうか。

○萩原代表理事 最初は僕たちが本当に地道にボランティア集団でやっていたのですが、そこから社協の方が注目してくださって、地元のフォーラムとか県のフォーラムとかで呼んでもらって、そこから自治会長さんが興味あるという話をしてくださって、そこから自治会の課題を知っていったら、僕もすごく興味が出てきて、いろいろな自治会長さんにヒアリングしていく中で、地域のつながりのところに地域の人たちが関わっているというのに気づいていったら、そっちのほうが一番効果的だな、本当に本質だなと感じてやってきました。

○石田構成員 分かりました。ありがとうございました。

○大西構成員 時間的なあれがあるので、私からも最後に少しコメントして意見交換のパートを終えたいと思うのですけれども、まず湯浅さんからは総論的なお話をいただいたと思っています、今、本当に居場所とつながりづくりというのはいろいろな施策で言われていて、官民連携もそうですよね。ただ、類似したこともいろいろやっているし、いろいろな予算の入り口があって、出口があってみたいなどころがあるものを、共通の絵をどれだけ描けるのかということと、具体的に地域でそれがいかに必要な形に適切に行くのかということとをこれからどうするのか。また、中間支援組織といったところが入ることによって、それをどう育成できるのかというお話だったかなと思っていました。

松崎さんからは、実は私もよる学校に行かせていただいたことがあるのですが、とても面白い場でして、人が集まる場がまずある。焼き肉会をやったらみんな集まる、肉を食べに行くみたい。でも、それだけではなくて、そこから違う次のテーマだったり課題だったりで見えてきたものを事業にしていくというのもすごく面白いスタイルですし、萩原さんのところも、関心を持っている若者たちを育成というか一緒にエンパワーしながら、既存の福祉的な課題を抱えていたりとか、過疎だったり高齢化している町会の人たちとどうマッチングするのか。でも、それもマッチングしてウオッチではなくて、伴走をどうできるのかということをやっているのが特徴かなと思っていて、お二人の活動はいずれも人を中心に、そこに集まる人を主人公に事業だったりとか支援の仕組みだったりを考えていて、また、人が集まるようなデザインだったりとか、仕掛けとか、きっかけづくりみたいなものをされているのかなということと、人が集まる場での対話とかコミュニケーションとかをすごく重視されていて、まさに自治的な取組なのかなとも思いました。

特に松崎さんの取組について、児童館の普段使っていない時間を使うとかは、行政的な目線で言うと、そこを有効活用しよう、どんな事業をやろうか、プロポーザルで募集しようみたいな上からの活動になりがちなのです。多分それだったら委託事業で終わってしまうのです。でも、そうではなくて、そういう情報を持ちつつも、草の根の人たちが集まった中で、これやりたい、あれやりたいというのをうまく引き出して、それをマッチングするという巧妙な上手な仕掛けをされているなと思っていて、これがもしかしたら民間ならではの発想だったりということと、行政的に持っているリソースの空きをどういうふうな今みたいな草の根の仕掛けでうまく吸い上げられるのか。

好事例の発信の仕方もすごく工夫が要ると思っていて、単純にこういう空きスペースが使えますよという、じゃあプロポーザル出しましょうと。それで委託事業になってしまうと多分うまくいかないのではないかな。いろいろな工夫の仕方のヒントが今日はいただけたような気がしますし、いろいろな取組の共通のビジョンのところ、湯浅さんがおっしゃっていたビジョンのところとどれだけエッセンスを入れられるのかということのもこれからのポイントなのかなと思って伺っておりました。

改めて、お二人、湯浅さんも含めてですけれども、貴重な御意見をありがとうございます

した。貴重なお話をありがとうございました。

時間になりましたので、締めくくりに友納政務官から一言いただければと思います。お願いします。

○友納政務官 本日は貴重なお話をありがとうございました。

この会は、いつも本当にたくさんの情報が入ってきて、頭の整理がなかなかできないのですけれども、最初の湯浅さんのお話の中で、私も初回に申し上げたのですが、「人の役に立つ」ということがすごく重要だと改めて感じました。先ほど、「あなたの力が必要だ」というお願いの仕方をしていく、助けてあげるのではなくて、という話があって、受援力の部分というのはまさにここがとても重要な点になってくるのかなと思って話を聞いておりました。

湯浅さんの資料17頁、まとめのページの2)伝えるの2点目、協議会とかコーディネート場がたくさんあって、その中でまた新たなものをつくるときにデマケになっているという話と、福祉プラスアルファになってしまうというところで、「国はそれを打開するリーダーシップを」ということでした。具体的な打開策というのが私の中ではまだ整理し切れなかったもので、本当はもう少しお話を聞きたかったぐらいなのですが、それは我々も考えていかなければいけないなとすごく思いました。

松崎さんのお話は、人を多面的に見る、タグづけが重要というのは、私はもともと看護師なので、問題点を抽出して、それに専門職が関わるという頭になってしまっているのも、目からうろこのお話でした。私の思考ですと、やはり専門職の支援が必要で、人手不足になり・・・と、同じ問題の堂々巡りになってしまいます。タグをつけるように関わっていくと、それはやはり人が必要になりますけれども、巻き込む人を増やしていったって、解決していけばいいという話につながっていきますので、すごく新たな視点をいただきました。ただ、石田先生もおっしゃっていた「ノウハウをどう共有していくか」というのを私もすごく感じましたが、さきほど回答をいただきましたので、参考にさせていただきたいと思います。

萩原さんの関わりは、「地域社会のあるべき姿だな」とすごく感じて、「確実な対話」という言葉が私はすごく印象に残ったのですけれども、問いを起点にどうしていくか、それをどうやっていくかというのはとても重要な視点だなと思いました。それぞれを繋ぐ場をつくってくださり、主体的に地域の若者を潰さずにエンパワーしていく、そのとき若者の特性を分かってやってくださっているというのはとても重要な取組と思いました。

今日の全体としては、「主体性」、松崎さんも主体性を育むコーディネートとおっしゃっていましたが、萩原さんも主体的にそれを潰さずに関わっていくと。それが一つ重要なポイントかなと。主体的にやっていただくということをどう支援していくかが重要なのかなと思いました。皆さまのお話の感想になってしまったのですが、学びの多い時間になりました。またこれを次につなげて考えてまいりたいと思います。

今日はありがとうございました。

○大西構成員 ありがとうございました。

次回の会合については事務局から改めて御連絡をいたします。

本日の会議は以上をもって終了いたします。ありがとうございました。